

「ルカノール伯爵」(10)

—パトロローニオの書—

ドン・ファン・マヌエル
木原 太 源 訳

国王や君主達は事の経緯を知ると、全員、彼にはとても不幸ではあったが処罰に値するようなことは何ひとつしていない、と判断しました。それどころか、彼を高く評価すると、君主を護るために父親を討たせた彼の忠義に褒美を与えました。これはすべて、彼の行為は人倫にもとるものではありませんでしたが、故意や悪意による行為ではなかった結果から生じたものでございました。

そういう訳でございますので、ルカノール伯爵様、これらの事例から、人間を天国へ導く行為は、立派なものであるのはもちろん、熟考の末に正しく行われているものでなければならぬ理由をご理解いただかねばなりません。また、地獄行きとなります行為は、申し分のある極めて意図的に行われているものなのでございます。善意あるいは悪意によるのか、また、熟考の末による意図的な行為なのかについての判断は、その意図に關係しております。すでに詩人はこのように言っているからで

あります。“Quicquid agant homines intencio judicat omnes”; つまりごとういう意味でございます。“人間の行為はすべてその意図によって裁かれるであろう”。

ルカノール伯爵様、天国の栄光を享受し、しかも地獄の苦患から身を護るために人間がなさねばならないと考えますことを申し上げました。さらに、現世を信じ、地位や家柄や財産あるいは若さ、または現世が与えてくれますその他様々な富のいずれかに頼って傲慢不遜になる人間は、いかに間違いをしでかしているかをお解りいただきますために、二つのことを少しお話し致します。良識ある人はすべて、私がこれから申し上げることを実行せねばならないとご理解下さい。

まず第一にお話したいことは、人間とは本来いかなる物であるかであります。これを理解する人は、人間は思い上がってはいけない、ということを知るであります。第二は、現世とはいかなる物であり人間はいかにして現世を克服すべきか、そして現世のために行うことからいかなる褒賞が与えられるかであります。これを考察する者は、良識ある人であれば、恒久である神の国を逃さぬよう現世のためには何もすべきでないことを悟るであります。

第一の人間は本来いかなる物であるのか。存分に言及することは極めて難しいと考えますが、神の御加護を得て、殿にお解りいただきたいことを、十分意を尽くして申し上げることに致します。

伯爵様、神がこの世に創造されましたすべての生き物の中で、無生物の中にさえも、人間のよう申し分ない面と欠けている面を併せ持つような生き物をひとつも創造されなかったことをお考え下さい。神が人間に与えられた申し分ない面は、魂と肉体から成る物をつくろうと判断されましたので、分別、理性、自由意志を授けられたことにあります。このことに関しましては、すでにドン・ファンが他の著述の中で記しておりますので、これ以上お話しは致しません。しかしながら、他の生き物も有しておりますが、人間が本来持つております多数の欠点や恥ずべき点についてお話し致します。

おそらく本来人間が持つております第一の欠点は、父親と母親の両方から生まれる際の生まれ方であります。本書は、読むのが恥ずかしく、記述させた者を下劣だと非難される多数の男女の方々も読めるよう、俗語で記述してありますので、それについてはあまり明確にお話しは致しません。しかし本書を読む人に良識が不足しているのであれば、これに関する知識が今必要とされることがよくお解りになるでありません。

母親の胎内に宿った後、胎児は妊婦の体内にだけあります体液のみを糧としてるのであります。神は胎児が生きていけるよう胎内に多量の体液を蔵されました。また胎は腐敗した有害な液の中にありますので、神は胎児とこの液との間に極めて薄い膜をもうけられました。これがなければ胎児の生存は絶対不可能でありましょう。また、胎内にいる間、胎児は労苦や窮

屈さに耐えるのがよろしいのです。七か月が経つと胎児は成熟しますので、それまでは十分足りていました体液も、成熟した胎児には不十分となります。ですから、足りない不満の意を表すようになります。胎児を保護しております膜が破れるほど不満が強くなりますと、もはや胎内には留まれません。これが七か月目に生まれた赤子であります。九か月目に生まれた赤子のようによく育ちます。しかしながら、七か月目になっても包まれている膜を胎児が破れない場合、費した労力のために疲労を蓄積させ体力を消耗したままの状態で八か月目に入りましても、胎児は痩せ細り体液も不足したままであります。ですから八か月目に生まれましても決して育ちは致しません。ところが九か月目に入りますと、丸一か月休養したおかげで体力が回復してきますので、今述べた理由から、いつ生まれても成育することができるので。九か月以上になればなるほどますます元気で、生命はよりいっそう確かなものとなります。ですから、十月十日^{とつきちか}を経て生まれてくる赤子は一番丈夫で元気なのですが、母親の身にとってはもっとも危険であります。そういう訳で、人間は、いずれにしましても、生まれて来る前に大変な辛苦や危険を体験しなければならぬことを、よくご理解なさって下さい。生まれるときに体験します危険や不安についてはお話しする必要はございません。すべての人々がこの上もなく大変なものであることは承知しているからであります。また胎児は生まれ出るとき、生まれたことが分かるように、われらが主なる

神は、赤子がひとりでに、あるいは本能的に、三つのこと、つまり、泣き声をあげたり、身震いしたり、指をしっかりと握りしめるよう、お望みになりました。赤子は泣くことで、不安と恐れを抱き続けながら生きなければならず、さらによりいっその不安と恐れを抱いて離れねばならないこの世で生を受けたことを悟るのであります。身を震わせることで、激しい不安と恐れを抱き続けながら生きなければならず、さらによりいっその不安と恐れを抱いて去らねばならないことを知らされるこの恐ろしい世に生を受けたことを悟るのであります。指をしっかりと握りしめることで、必要以上のものを渴望し続けながら決して満たされることのない喜びを見付けられないこの世に生を受けたことを悟るのであります。

また、人間は生まれ出たとき、大変な苦勞や煩わしさをやむなく体験しなければなりません。なぜなら、寒さや暑さそれに風を防ぐためにくるまっまっている産着は、皮膚の柔らかさに比して、どれほどしなやかでありましょうとも、荊でできているかのように、ざらざらしているように思えるからであります。また、赤子は考える力がありませんし、自由に手足を動かせる状態にありませんので、喋ることも、感じていることを理解させることもできません。ですから赤子の世話をし育てる人は、泣き声で泣いている理由、つまり、退屈やいらだちを察知します。喋るようになり始めると同時に、幼児はとて苦勞します。言いたいことが少しも言えないのと、したいことをさせてもらえ

ないからです。したがって、あらゆることに意に反してじっと我慢しなければなりません。

また、考える力が付き始めましても、まだまだ不十分でありますのに、自分にとって良くないものやおそらく害を与えるようなものをしょっちゅう欲しがります。彼らを育てる人はそのようなことは許しませんし、彼らの願いと反対のことをさせます。幼児のときの不快感は大人よりは大きくありませんので、強い怒りやいらだたしさを我慢します。

また、成人して分別が付いたとき、病氣や不幸そして突然襲う悲しみや苦しみによって激しい不安を体験します。各自それぞれの胸に手を当てて下さい。本当のことを言えば、喜びよりも不安や恐れを抱いた日々のほうが多かったことがお分かりになるでありません。

また、老年になってからの不快感は述べる必要はございません。老人には自らの肉体も目に入るすべてのものも不愉快だからであります。それゆえ、おそらく周囲のすべての人々は老人と気まづい関係にあります。老齡期が長引けば長引くほどこのような状態も長引くとともに強まりますし、最後には死がやって来ます。死を避けることは不可能ですし、死は肉体と愛するものすべてを、人間の悲痛な叫び声にもかかわらず、引き離します。誰も死から逃れることは不可能ですし、死ぬのにふさわしい刻ときはありません。死は、少年や青年同様老人にも、また老人自身と彼を愛する人々にとっても非常に残酷であり不快であ

ります。貧しさや病気で死ねば、友人や敵対者には軽蔑されま
すし、裕福にしかも敬われて死ねば、友人は非常に残念がしま
すが敵対者は大喜びします。それは死者にとって友人の悲嘆と
同じぐらい快いものではありません。さらに、金持ちには詩人
が言ったことが生じるのです：“Dives divitiarum,” etc., つま
り、金持ちは苦勞の末に富を集め、不安におののきながら富
を享受し、断腸の思いで富を残す、”という意味であります。

このような理由から、富がもたらす様々な不都合に留意する
賢明な人なら誰でも、富を重んじてはいけないことを理解しな
ければなりません。

このほかに、前述しましたように、人間はあらゆる生き物の
中において最も不完全な生き物であります。身を覆う物何ひと
つ有していないからであります。すべての生き物は寒さや暑さ、
そのうえ敵からも身を護るために皮や毛や貝殻や羽根で身を覆っ
ておりますのに、人間はこのような物を何ひとつ有しておりま
せんので、他の生き物が身に付けている物で身を包むか覆わな
ければ生きることが不可能であります。

また、すべての生き物は食べ物世話の世話をされなくても自力で
確保しますが、人間は他人の助けがなければ身を養うことはで
きませんし、他人から教わらなければ生きて行く術が分かりま
せん。また、人間は生きて行くのに、生き物のように、肉体や
健康のためにふさわしい調和を保って生きる術を知りません。

このようなことから、ルカノー伯爵様、殿は人間がこういっ

た欠点を持っていることがはっきりとお分かりになりました。
それゆえ、人間は傲慢不遜になればいかに無分別な振る舞いを
するかにご留意をなさって下さい。

第二は現世についてであります。三つに分けてお話し致し
ます。すなわち、一つ目は現世とはいかなる物であるのか、二
つ目は現世において人間はいかに生きるべきか、三つ目は現世
のために行うことのでいかなる褒賞が与えられるのか、でありま
す。

伯爵様、この三つのことについて思う存分述べたい方は、間
違いなく、書を一冊書き上げるだけの材料がおりなのであり
ましょう。しかしながら、私は十分に話して参りましたので、
殿や本書の読者は、私がとても話し好きである、と思われてう
んざりしておられるのではと懸念致しております。それゆえ、
殿に最小限のことだけを申し上げた後に、擱筆する所存であり
ますので、さらなる無理強いをなさらぬようお願い申し上げま
す。これ以上はお話しするつもりは決してございませんし、す
でに申し上げておりますこと以外はお話し致しませんので。と
ころで、これから申し上げたいのはこのようなこととございま
す。三つの内の一つ目、現世とはいかなる物なのかであります
が、肝要なことを申し上げねばなりません。理解してございま
すことを可能な限り簡略にお話し致します。

この現世という名称は「動き」および「変化」に由来してお
ります。この世は常に動いておりまた常に変化しておりますの

で、決して同じ状態のままではありません。また、現世およびそこに在る万物もじっとしてはおりません。それゆえにこの名称を有しているのであります。創造された万物がこの世を形成してまいりますので、この世は神の創造物であります。神は役立つと判断されましたとき、思い通りにこの世を創造されましたので、神が有用であると判断される物はすべて永らえるであります。神のみが終わらねばならない刻と、その刻に生じる出来事をご存じなのであります。

二つ目の現世において人間はいかに生きるべきかについてありますが、すべてのことを申し上げるのはとても難しゅうございます。人間は三つの方法で現世を送るのであります。一つは、富や名誉や快樂といった現世のことや、出来る限りの方法で欲望を満たすことに、もっぱらこのことだけに留意して、関心や知性のすべてを注いで過ごす方法であります。つまり、彼らは現世を楽しく過ごすことが一番大事なことであると言っているからであります。来世に在る人で、そこでの暮らし振りを伝えるにあの世から来た人がいないからであります。現世で生きる二つ目の方法は、天国の栄光を得るような振る舞いをしたいと思つて過ごす人の方法であります。しかしながら、彼らは富や地位を守るためにしなければならぬことを控えることができませぬ。ですから、彼らはそのことに精いっぱい頑張ると同時に魂の救済にも務めます。現世で生きる三つ目の方法は、現世に在る自分はよそ者だとみなしており、生まれて来た主たる

目的は魂の救済であつて、この世にはそのためにやって来たことを承知していますので、魂を最良にして最も確実に救えることのみを行う人の方法であります。

第一の方法は、現世のことに関心や知性を向けており、わざと良識はずれな振る舞いや不利益な行為や全く分別のないことを行う人の方法なので、その行為を十分説明できる人はこの世におりませぬ。しかし、すべての人がその行為を愚行だとは考へませんが、十マルクの値打しかない物に百マルクを与える者がいないことは、殿も先刻ご承知のことです。つまり、神の創造物であります非常に気高い魂を神の敵である悪魔に与える人は、おそらく二日と続かない、また、どんなに続いても永遠であります地獄の苦患と比べれば、一日と続かない快樂や榮譽と引き換えに魂を与えることになります。現世においてさえも、失つても気にならないものと引き換えに与えられる喜びや榮譽や快樂は、瞬く間に終わつてしまします。快樂は、いかに大きなものでありましても、飽きさせないものはありません。喜びは、いかに大きくて長続きしても、遅かれ早かれ、悲嘆に暮れながら別れねばなりません。榮譽は、いかに大きくても、高めそして維持するために忍ばねばならない様々な不安や苦勞や悩みのことを考えれば、多大な犠牲を払わせないものはありませぬ。ですから、各自それぞれがこれらのことから生じたことを考慮し銘記して下さい。もし真実を述べなければ、私の言葉通りであることがお分かりになるであります。

また、富や栄誉や地位を気にしつつ魂を救おうと努力しながら現世を送る人は、過ちを犯すかもしれませんし、最良のものを捜し当てるかもしれません。なぜなら、魂の救済にとって肝要なことをできる限り行いながら関心事に留意すれば、一番重要なことを見付け出して見事にそれを行うかもしれないからであります。多くの国王や大貴族や高い身分の方々には名誉や地位を保持するとともに、魂を救いつゝ聖人になれるように行動する術を弁えていたからであります。現世はこのような人を欺くことはできませんので、現世にしか望みを賭けない者に与えるのが常であります褒賞を、彼らには与えなかったのであります。このような人々は活動的であると同時に観想的であると言われる二つの生き方を保っております。

現世にいる自分はよそ者だとみなしながら暮らしていますのに、確実に魂を救えるものにはか留意しない人々は、明らかに最良の道を選ぶ人ではありません。私はその通りだと考えますので、思い切って、確かにこのような人は最良の道を選ばれるのだと申し上げます。福音書には、マリアは奪い取られない最良の部分を選び取られた、と述べているからであります。この道を選べた人々がたどるのであれば、魂にとっては、必ず、とても為になりまた安全でありましょう。しかしながら、すべての人がそれを行えば現世は消滅しますが、われらが主はそのようなことはお望みではありませんので、ほとんどの者は前述しました二つの方法で現世を過ごさざるをえないのであります。

神は、慈悲の御心から、人間がこれら三つの内の第二と第三の方法に依拠して過ごし、第一の方法で過ごすのを避けることを願っておられます。それは、きつと、第一の方法に従った結果不幸な死を遂げなかった者が誰もいなかったからであります。それゆえ、私は殿に申し上げますが、国王から最下層の者にとりまして、肉体の惨めな最期や魂の地獄行が確実なものとなりましてこの方法で過ごそうと考える人に会ったことはございません。悪魔は常に、人間に俗事と引き換えに神の道を捨てさせようと必死に努力していますので、本書の次のような教訓談の中で語られているのと、つまり、悪魔が友人のドン・マルティンに与えたのと同じ褒賞を人間に与えようと、いろいろ努力しているのをごさいます。

さて、ルカノーブル伯爵様、本書中の教訓談や格言以外に、私は、魂はもとより肉体および名誉や財産そして地位を護るために、意を尽くしたと考えます。神は称賛されてあれ、私の拙い知性に鑑みますと、予告致しましたことはすべて終了致しました。

そういう訳でございますので、本書に終止符を打つことに致します。

ドン・ファンはサルメロンで本書を書き終えた。時は一三三五年六月十二日曜日であった。